

白  
黒  
つ  
か  
な  
い

ニ  
ノ  
キ  
ノ  
コ  
ス  
タ  
ー

## 【登場人物】

石川 聡 イシカワ サトル (制作 / 24歳 / 男) 中途 新入社員  
高瀬 知佳 タカセ チカ (制作 / 30歳 / 女) 中途入社5年目  
清見 忠志 キヨミ タダシ (制作チーフ / 35歳 / 男) 中途入社7年目  
水野 正登 ミズノ マサノブ (営業 / 23歳 / 男) 新卒入社1年目  
沢口 頼子 サワグチ ヨリコ (営業チーフ / 35歳 / 女) 初の新卒入社13年目  
郡井 千鶴 コオリ チヅル (経理兼営業サポート / 28歳 / 女) 中途入社3年目  
糸田 治郎 イトダ ジロウ (社長 / 49歳 / 男) (株)ライフワークデザイン 社長  
味方 勇気 ミカタ ユウキ (人事歴1年 / 28歳 / 男) 「味ごま塩」の会社(株)ミカタ 人事担当

## 【舞台設定】

求人広告代理店(株)ライフワークデザインのオフィス。  
中央に大きな机があり制作部のスペースになっている。  
左手には小さな机と椅子が二脚、打合せスペースになっている。  
そこには扱っている求人誌「ジョブプレ」や新聞などが並べられている。  
右手にはバーカウンターがあり、DJブースまである。  
奥はパーテーションで区切られ、裏が営業部のスペースになっている。

電話が鳴り響いている。

清見 はい、ライフワークデザインです。お疲れ様です。8時ですね、了解です。はい。

中央のスペースに制作の清見が一人座っている。

Tシャツにジーンズと、ラフな格好だ。

打合せスペースに座っている二人は、押し黙っている。

一人は新人営業の水野。まだ真新しいスーツだ。

もう一人は制作の高瀬。派手なカットソーを着ている。

高瀬 そんだけ？

水野 はい。

高瀬 今日の取材、頼子さんと一緒に行ったんじゃないの。

水野 一人で行了きました。

高瀬 無理。

水野 え。

高瀬 これじゃ原稿作れない。自分だったら、こんだけの情報で作れる？

水野 いやあ……

高瀬 あんた、想像力が足りなさすぎ！

だから、こんだけしか聞いてこれないんだよ！

玄関から石川が入ってくる。

薄手のパーカーにクラッシュジーンズと、一見、学生のようなだ。

石川 戻りましたー

清見 うーい。

石川は自分の席につく。

が、高瀬の荒々しい声が耳に飛び込んでくる。

高瀬 で、ターゲットどうすんの。

水野 はい、20代の若い男性で、地元に住んでいる方がいいと。

高瀬 本気で言ってるの？ この会社、食品工場だよ？

水野 でもお客さんがそういう人が欲しいとおっしゃってて……

高瀬 御用聞き営業やってんじゃねえよ！

石川 (二人を差し)……どうしたんすか

清見 新人の誰しもが通る道だよ。

石川 ……はあ。

清見 どうだった試験。

石川 多分、大丈夫だと思うんですけど。

清見 他社から来てるの、営業ばっかだっただろ。

石川 ああ、そっすね。制作は俺だけでした。

清見 やだねえ、不景気。

石川 清見さん。

清見 ん？

石川 年齢制限が認められるのって正社員だけでしたっけ。

清見 基本的に不可だけど……

石川 「例外事由3号のイ、期間の定めがない労働契約かつ、

長期雇用によるキャリア形成を図りたい場合」(ぞしたっけ)？

清見 そうそれ。

石川 じゃあ、満点っすわ。

清見 やるじゃん。

高瀬 もう時間ないから。あとやっとかから。

水野 よろしくお願いします。

無視して自分の席に戻っていく高瀬。

高瀬 ホント腹立つわアイツ。

清見 やらかした？

高瀬 むしろ何もやれてなさすぎ。

石川 あの。

高瀬 あ？

石川 今日、この後、どうしたらいいですか。

高瀬 日報。打ち終わったらまた言って。

石川 うす。

高瀬 頼子さんも何で水野に引き継いだんですかね。

清見 まあ、他にいないしねえ。

高瀬 ミカタはウチの上位顧客ですよ。頼子さんがそのままやった方が絶対良いじゃないですか。

と、石川が勢いよく会話に割り入ってくる。

石川 ミカタって、あのミカタっすか！

高瀬 (勢いに戸惑い) そ、そう。味ごま塩の。

石川 あれっすよね、古いCM、ずっとやってる。

高瀬 そうそう。

石川 (急に陽気に歌い始める) 「味ごま塩のミツカッタツ♪」

清見 お、おお。(やや引いている)

石川 えええ、凄いつすね。ウチの地元じゃ、知らない人、いないっすよ。

高瀬 何？ 担当したい？

石川 いいんすか！

高瀬 まだ早えよバーカ。

と、パーティーションの向こう側から郡井がやって来る。

郡井 石川くん、おかえりなさい。

石川 うっす。

郡井 頼子さんってまだ戻ってない？

高瀬 まだ。

郡井 そっかあ。 どうしようかなあ。

高瀬 チヅちゃん、今日急ぎなの？

郡井 うん、ちよっとね。

高瀬 あ。

一人でニヤニヤしている高瀬。

郡井 いやあのねチヨコさん、

清見 郡井さん。

清見、真顔。

つられて、やや緊張する郡井。

郡井 ……え、なんですか。

清見 さっき8時帰社って電話きたわ。

すぐに緊張がほぐれる。

郡井 そういうことはちゃんと伝えて下さいよ、もー！  
清見 (笑いながら) 悪い悪い。

高瀬 ねえ、今週どれくらい入ってんの？

郡井 二百万くらい？

高瀬 きつつう。

郡井 まあ水野くんも慣れただろうし、これからじゃない？

高瀬 自分の食い扶持すら稼げないのに？

郡井、苦笑している。

高瀬 どう考えても比率おかしいよねえ。制作じゃなくて営業を増やしてくんないとさあ。

と、スーツ姿の女性(頼子)が威勢よくやってくる。

頼子 ただいま戻りましたー！

全員 おかえりなさい(ロタに)

頼子 ミーくん！

清見 はいはい。

頼子はピシッと指を立てた。



清見 (笑って) やったじゃないですか。

頼子 3本とも入った!

全員 おー。

清見 直し、あります?

頼子 ナツシング!

全員 おー。

高瀬 頼子さん、流石ですね。

頼子 ふっふっふ。 あ、でもデータの修正ちよつとあるから、今、赤入れるね。

清見 了解。

清見の横で、原稿の赤入れ指示をしている頼子。

石川 なんか、猫みたいっすね。

高瀬 何が?

石川 清見さんのあだ名。

高瀬 ああ……。 まあ、ミーくんってガラじゃないよね。ボークンとか、そんな感じ。

清見 それ、俺がよくボーツとしてるから?

高瀬 辛党だから。

やや間をおいて、郡井が噴き出す。

清見、苦い表情。

高瀬 今の面白かった？ 面白かった？

郡井 (笑いながら) そうだよね、うん、ピッタリだよ、ボークン。

石川 (分らない) え？ え？

高瀬 清見さん、一時期、おやつに激辛スナックばかり食べてたの。

石川 (ようやく理解し) ああ！ ハバネロ！

清見 一週間下痢が続いてさすがに止めたけどな。

石川 でもボークンだと、ポークとか、クーポンみたいな響きつすよねえ。

清見 おいおい、新人が俺のことスーパーの売れ残った豚肉扱いするんですけどー。

ケラケラと笑っている制作の面々。

頼子 ミーくん、ブーくんになったの？

清見 なってないなってない。

頼子 チヅちゃん、コレ発注書。ミーくん、修正はコレだけ。よろしくね。

清見 うい。

頼子 チョコちゃん、ジョブプレペーパーの半ページ発注したいんだけど。

高瀬 はーい。

頼子 あ、その前に一本電話してから。

高瀬 アンタも来な。

石川 はい。

頼子 お世話になっております、株式会社ライフワークデザイン営業担当の沢口です。

石川と高瀬が打合せスペースに移動していく。

高瀬 打ち合わせ、初だよな？

石川 はい。先週は、研修だけだったんで。

高瀬 オツケ。

高瀬、打ち合わせスペースに置いてある冊子を広げ、

高瀬 これがジョブプレペーパーの、半ページ原稿ね。左側にデータ欄、右側にフリースペース。

データの編集方法は先週教えたよね。職種、給与、勤務地は上の欄で、他は下の欄。右側のフリースペースがウチら制作の本領発揮なんだけど、

これは、社風を出すために写真とキャッチ一本で勝負してるねえ。

誰が作ったんだろ。このコピーの口調はアドスペースの志筑さんかなあ。

こっちはギョウウケ。業務請負だから、デザインメインだね。

うわー…… これ編集すごい面倒臭そう……

高瀬、石川に目をやる。呆けた顔をしている石川。

高瀬 聞いてた？

石川 はい。あの、はい。

高瀬 何？

石川 いや、本当に、俺が広告、作るんだなーと。  
高瀬 ……。

遅れて頼子が打ち合わせスペースにやってくる。

頼子 悪い悪い（遅れたことに対して）

高瀬 いえいえ。で、どこですか。

頼子 ミカタの支店の営業募集。

高瀬 水野に引き継いだんじゃないんですか？

頼子 本社はもう任せてるけど、支店はまだ。

高瀬 ああ。

頼子 で、相談したいのが、これ前回の原稿。チョコちゃんが担当したよね。

高瀬 はい、そうです。

頼子 電話応募が3件しかなくて、結局採用に至らず。

高瀬 うわー！ マジですかあー…

頼子 マジ、マジ。

高瀬 やっぱり立地かなあ。駅は遠いし車通勤のみだし。

頼子 それもあるけど、やっぱり経験者募集がネックになったみたい。

応募してきたのが、元機械営業45歳、元不動産営業48歳、元飲食店長38歳。

それで、小森さんと話してきたんだけど、

高瀬 え？ ミカタって人事担当変わりましたよね？

頼子 うん、社長の息子にね。小森さんは部長に昇進されて、そのお目付け役。

高瀬 うわあ、相変わらずワンマンな……。

頼子 それで、ハードルを下げて、営業未経験でもカウンターとかフロアとか、接客経験があればOKにしようって話になったの。

業務フローを見直したら、営業課長が育成もやれそうだから。

高瀬 おっ。営業課長の写真あります？

頼子 モチ。後で取材記録と一緒に送るね。

高瀬 新規開拓、月給16万、車通勤、35歳以下、接客経験者かあ。

うーん これはなかなか……

頼子 厳しい？

高瀬 やりがい、ありますねえ。

頼子 よろしく！

頼子、出かける準備を始める。

高瀬 こんな感じ。分かった？

石川 いやあ……

高瀬 メモとった？

石川 あ。

高瀬 取れよバーカ。

石川 ……すいません。

高瀬 とりあえず、自分が思うようにやってみな。

石川 え、はい。

頼子、バタバタと出て行く。

頼子　　いってきまーす！  
全員　　いってらっしゃーい。

営業スペースから郡井が出てくる。

郡井　　私もお先に失礼します。  
清見　　へいへーい。

帰っていく郡井を見ながら、

清見　　×切前日の9時前に帰れるとか、いよいよキテるねえ。  
高瀬　　私も帰りますけど、何かあります？  
清見　　大丈夫。

高瀬、帰る準備をしながら……

高瀬　　（石川に）取材データと写真、フォルダに入れておいたから。

石川　　はい。

高瀬　　さっきの原稿、朝イチで出してね。

石川 え。

高瀬 (へムツとして) 私がチェックしてからじゃないと頼子さんに渡せないでしょ。

石川 分かりました。

高瀬 じゃあ、お先。

石川 お疲れさまです。

帰っていく高瀬。

清見 あー、疲れた。 あー、しんど。

と、清見、手元のジョブペーパーをパラパラとめくりながら、  
ブツブツと喋り始める。

清見 白、白、白、黒、黒、黒、白、業界的に黒、白、黒。

石川 何してるんですか？

清見 ホワイト企業がブラック企業が当てる遊び。

石川 へ、へえ……。

清見 何？ お前、ブラック企業知らないの？

石川 知ってますよ。アレですよ、給料が安いとか、有給がないとか、そういう……

清見 そうそう。その反対がホワイト企業ね。

石川 ウチは？

清見 ン？

石川　　ウチはホワイト企業ですか？　ブラック企業ですか？

清見、しばらく考えたのち、

清見　グレーかな。

清見、ジョブペーパーを机上に放り投げ、

清見　あーあ、なんか面白いことねえかなあ。

石川　……………。

と、営業スペースから身支度をした水野がやって来る。

水野　僕、そろそろ帰りますけど、お2人はどうされますか？

清見　俺も帰るわ。

水野　石川さんは？

石川　先輩なんですから、さん付けないでくださいよ。

水野　（困りながら）でも石川さんのほうが、年上なので……………。

水野、石川のPCモニターが目に入り、

音にならない気付きを発する。



石川 ミカタの支店の、営業募集です。

水野 頼子さん（が持ってきた）？

石川 そう。

水野 ああ……。 どうですか。

石川 いやあ、まだ何にも分かんないすねえ。

水野 それは僕もそうですよ。

石川 でも水野さん、ホラ、第一……。 ナントカ……。 から入社してるんでしょ。

水野 第一トレス（のこと）？

石川 社内用語っていうんですか？ そういうの多いっすよね。

普通に「第一期」とか「4月」とか言えはいいのに。

水野 ジョブプレ本社の用語ですからね。ウチみたいな専属代理店は、みんな使ってますよ。

他の業界はどこも半年区切りみたいですけど、一年を4つに区切るっていうのはそれだけ短期での結果が求められる業界だってことです。

石川 ……へえ。（感嘆）

水野 （急な感嘆に疑問を持ち）ええ？

石川 いや、今、水野さん、めっちゃ先輩ぽかったっす。

柔らかに、しかし、苦笑する水野。

と、水野の携帯が鳴る。

水野 ライフワークデザイン 営業担当 水野です。お世話になっております。はい、金曜7時からです。

聞かせづらい話題なのだろう。隠れるかのように、パーティーションの方へ向かっていく水野。

水野 それで、女性側が3人しか呼べなかったみたいなんですけど…… はい…… すいません。  
看護師さん、みんな22歳です。 あ、そうですね、ありがとうございます。  
はい。 ゴルフは、予定通り。 はい、ありがとうございます。 失礼いたします。

電話を切り、ふう、と息をつく水野を見て、

清見 お前、合コンのセッティングまでしてんの？

水野 まあ、あの…… 大変お世話になっているので……

清見 よくやるなあ。 オレ絶対無理だわ。

石川 大変っすね、営業って。

はは、とチカラなく笑う水野。

水野 じゃあ、僕、お先に失礼します。

石川 お疲れ様っす。

水野 電気消して、コピー機のコンセント抜いて、警報スイッチ入れてから出てくださいね。  
鍵は一階のボックス、1159イイコウコクです。

石川 うす。

清見 がんばれよー。

帰っていく水野と清見。

誰もいなくなったオフィスは、とても静かだ。

時折ビルの下を通る車の音がする。

時計の秒針が、いやに大きく響く。

石川、大きく伸びをして、

石川  
……よし。

ヘッドフォンで音楽を聴きながら作業を始める。

と、電話が鳴る。

石川は気づかない。

電話はしばらく鳴り続けた後……切れた。

夜は、更けていく。

■ 2 九月下旬 昼三時

電話が鳴り響いている。

と、何台も、次々と鳴り始める。

応対する声もあちらこちらから聞こえてきて……

ブラインドから光が差す。

高瀬 はい、ありがとうございました。

電話を切る高瀬。

高瀬 (石川に) ちよっと。

石川は原稿のチェックに必死だ。

高瀬 石川！

石川 はい。

高瀬 電話出る。

石川 あ、はい。

社内は締切日をかえ、大変せわしない。

郡井 今月、残り9万です！  
全員 はい（ロク々に）

頼子が奥から駆け込んでくる。

頼子 ミーくん！ ジョブプレーページ、今からいける？

清見 高瀬さん、いける？

高瀬 はい。これ不備ないかチェックして。（石川に原稿を渡す）

石川 はい。

水野 清見さん、ジョブプレWEBお願いします。

清見 あいよー。

石川 チェック終わりました。

清見 じゃあ次コレ。

高瀬 （頼子に）この原稿を流用すればいいですか？

頼子 うん。キャッチ、一部変えて。

高瀬 了解です。

石川 チェック終わりました。

郡井 水野くん、契約書。

水野 すぐ出します。

高瀬 頼子さん、原稿あがりましたけど……

電話中の頼子が「紙で出して」とマイムで伝えてくるので、同じように「OK」とマイムで伝える高瀬。

印刷物を取り頼子に渡したところで、何をしてもなく考え事をしている石川に気付く。

高瀬 アンタ、自分の原稿、全部チェックに回したの？

石川 あ。

高瀬 先に出せよ、バーカ。

石川から受け取った原稿をチェックし始める高瀬。

清見 水野ー、URL送ったー。

水野 ありがとうございます。

郡井 今月、営業目標達成です！

拍手をする面々。

頼子 良かったー。 ……良かったあ。

頼子は、喜びを噛みしめている。

郡井 ……半年ぶりですかね。

頼子 んー、差し引き一年ぶりくらいじゃないかなあ。ホント良かったー……。

嬉しそうな頼子を、嬉しそうに見ている郡井。

郡井 水野くん、出し忘れた契約書、もうないよね？  
水野 はい。

清見 そろそろデータロック掛けるよー。

全員 はい（ロク々に）

高瀬 これマズイな。

石川 え。

高瀬 あんた、この原稿ヤバイよ。

石川 え……どこっすか。

高瀬 ほら。

赤線と注釈がたくさん書かれた原稿を見て、青ざめる石川。

石川 こんなに？

高瀬 あんた3ヶ月何してたのよ！　すぐ原稿直せ！

石川 は、はい。

水野が電話を掛けはじめる。

高瀬 この原稿でラストですか？

清見 うん。

水野 お世話になっております、ライフワークデザイン 営業担当の水野です。

はい。大変申し訳ないのですが、今週の原稿にいくつかミスがございまして、表現を少し変更させて頂きたいのですが……

はい、本当に申し訳ございません。申し訳ございません。申し訳ございません。はい、後ほどFAXいたします。ありがとうございます。

水野が電話を終える。

水野 石川さん、こちらの裁量で変更して良いそうです。

高瀬 あと5分。

石川がカタカタと打ち込む中、社内は緊張した空気に覆われる。

清見 何を間違えたの？

高瀬 ホントひどいですよ。

清見 教えてよ。

高瀬 「25歳以下」、年齢制限不備。「女性限定」、性差別表現。

「中国人・フィリピン人歓迎」、国籍差別表現。「祝オリンピック求人」、商標登録侵害。

「写真に某ネズミがチラリ」、著作権法違反。

清見 (笑って) 立直一発ツモ満貫ドーンって感じだな。

清見の発言に、眉をひそめる郡井。



石川 入稿、しました。  
清見 ほーい。

カチ、カチ、カチ、と三度だけマウスをクリックする。

清見 データロックオッケーです。

社内に安堵の空気が流れる。

清見 (楽しそうに) 久々だなあ、こんな修羅場ったメ切日。

高瀬 笑いごとじゃないですよ。

清見 そう？ (石川に) お前、やるなあ。不備の見本市じゃねえか。

いや、不備問屋？ いや、もう不備コンツェルンだよ。

石川 はあ。

水野が空いている席に座り、紙に何か書いている。それをピッと奪い取り、石川に渡す頼子。

頼子 直した原稿、ここにFAXしといてね。

石川 は、はい。

頼子 じゃあ、いってきまーす！

全員 いってらっしゃい。(ロ々に)

頼子が出て行った途端、静かになる社内。

高瀬 (石川に) あんたさあ。

石川 え。

高瀬 ……いや、なんでもない。

水野が、電話をしている。

水野 お世話になっております、ライフワークデザイン 営業担当の水野です。何度も申し訳ありません。

先程の原稿ですが、今からFAXお送りいたしますので。はい。はい。本当に申し訳ございません。申し訳ございません。来週、またお伺いいたします。はい。承知しております。

この度は誠に申し訳ございませんでした。ありがとうございました。

石川 ……。

チャイムが鳴る。

電話を取る郡井。

郡井 いらっしやいませ、ライフワークデザインでございます。……はい、少々お待ちくださいませ。

水野くん、ミカタさんいらっしやったよ。

水野 え？

郡井 (笑って) 何、その顔。

玄関を開け、客を招き入れる郡井。

その後ろをついていく水野。

味方 おお、元気？

胸に「ミカタ」と刺繍されたジャンパーを着た、若い男性が現れる。

水野 味方さん、どうされたんですか。

味方 支店出張。もう帰るだけだから寄ったんだよねー。これやるよ。

ミカタのロゴマークが入った紙袋を手渡される。

水野 お手数かけてすみません。

味方 いいって、いいって。

味方、打ち合わせスペースに置かれたジョブプレーパーを見て、

味方 やっぱリジョブプレ、置いてあるんだ。ねえ、(社内を)見ていい？

水野 あ、はい。

社内を見渡している味方。

味方 へえ。結構フツーだね。

清見 いらっしやいませ。

味方 ああ、どうも。

水野 制作チーフの清見さん、あ、清見、です。

清見 お世話になっております、制作チーフの清見忠志です。(名刺を渡す)

味方 何回か原稿送ってくれた人だ。

水野 ミカタの人事担当の、味方勇氣さんです。

清見 いつもお世話になっております。

味方 こないだアンタが作った原稿、かなり応募きてさあ。良かったよ。

清見 ありがとうございます。

味方 その前のは分母が少なすぎてさあ。やっぱり大勢の中から選びたいじゃん？ こっちも。

郡井 水野くん、お茶、置いておいたよ。

水野 ありがとうございます。

打ち合わせスペースに座る2人。

水野 先週の反応、いかがでしたか。

味方 ボチボチかなあ。あのチーフさんが作ったヤツに戻せない？

水野 ……分かりました。また新しくご提案いたします。あと先日お話しした新卒採用についてですが、

味方 そういうのよく分かんないから、上手いことやっというて。

水野 ……はい。次回お伺いする際に、企画書をお持ちします。

味方 それよりさあ、アンタ今から空いてる？ こないだの看護婦たちにまた誘われてんだけど。  
水野 夜9時以降なら多分、  
味方 そんな時間まで働いてんの？ お宅、ブラックだねえ。  
水野 ははは……（苦笑）  
味方 終わったら連絡ちょうだい。  
水野 分かりました。  
味方 じゃあまた後で。

出て行く味方。

郡井 ……何しにいらっしやっただの？  
水野 本当にただ寄っただけなんだと思います……。  
高瀬 カンジ悪い。アイツでしょ、こないだ20代の若い男がほしいとか言ってたの。  
水野 ……でもミカタさん、いい所もあるんですよ。親分肌ですし、  
高瀬・郡井 いやいやいやいや。  
高瀬 取引先にアポ無し訪問する時点で社会性ゼロ。これだから二代目のボンボンって嫌いなよ。  
アンタちよっと舐められすぎじゃないの？

郡井もウンウンと強く頷いている。

郡井 水野くんは優しすぎるよ。お客さんだからって何でも聞いてたら、どんどんキツくなるよ？  
水野 はは…… あ、コレ、お土産いただいたんですけど皆さん良かったら……

水野、紙袋を出す。高瀬、受け取りながら、

高瀬 いい奴じゃん、ボンボン。

清見 現金だなあ。

高瀬 (紙袋の中を見て) げ。

郡井 何が入ってた？

高瀬、中身を出す。それは、味ごま塩の小さな瓶。

郡井 味ごま塩だ。

清見 オヤツにはなんねえなあ。

高瀬 コレをどうしろと？

水野 あ、本当に、美味しいですから。

塩は、湾内の海水を昔ながらの平釜式で作ったもので、ゴマも国産の……

高瀬から紙袋を受け取った清見、中を見て驚く。

清見 うわっ。

郡井 すごい！

清見が取り出したのは、お徳用味ごま塩の瓶。かなり大きく、2リットルのペットボトルほどもある。

高瀬 この商品を開発した人は、何？ 毎日ごま塩食べてんの？ ごま塩ダイエットでもしてんの？  
郡井 こんなに食べきれないよねえ。

清見 賞味期限、十一月三十日だって。

高瀬 ニカ月で食べきるの？ 無理でしょ。

郡井 よく考えたら、味ごま塩、つてのがよく分からないよねえ。何でグルタミン酸入れたんだろう。

清見 グルタミン酸ナトリウムな。

郡井 グルタミン酸ナトリウムにナトリウム入れたの？

高瀬 ナトリウム入れすぎじゃない、それ。体に悪そう。

清見 塩化ナトリウムね。

郡井 グルタミン酸ナトリウムと塩化ナトリウムとセサミン？

清見 郡井さん、それっぽいこと言いたいだけでしょ。

水野 まあ、本当に美味しいですから。良かったら使ってみてください。  
感想も聞けたら、ありがたいです。

高瀬、ニヤニヤと笑いながら、

高瀬 アンタ、ミカタの営業マン？

水野 いえ、違いますけど……

何を言われたのか分からず、戸惑っている水野。

と、

石川 水野くん、今のは嫌味だよ。

水野 あ……。

石川 打ち合わせ、しよ。

水野 は、はい。

打ち合わせスペースに移動していく2人。

石川 さっきの。

水野 え？

石川 メ切前の。 原稿。 不備の。

水野 ああ…… まあ問題ないですよ、来週お詫びにお伺いしますし。

石川 ……。

水野 ……すいません。僕もまだ何が適切で何が不適切なのか曖昧で、

石川 水野くんが謝ることじゃないだろ。

水野 ……すいません。

石川 オレ…… なるべく頑張るよ。

選んだ言葉は曖昧だが、石川の目は真剣だ。

水野 ……はい。ありがとうございます。



水野は資料を机に並べ始める。

水野 コレが、ミカタさんが今まで会社説明会で配布していたパンフレットです。  
コッチが、競合他社で掲載していた原稿です。

パラパラと見始める石川。

水野 地元ではライフワークバランスが取れているホワイト企業としても、有名ですね。  
石川 うん。 小学校の同級生も、何人か勤めてる。

水野 そうか、石川さんも地元でしたよね。

石川 え、水野くんも？

水野 そうなんですよ。 いい会社ですよねえ。

石川 ……どうだろうね。俺には面白そうには思えないんだよな。  
働き方って、本当に人それぞれだろ。

毎日終電でもやりがいあるから楽しんでるヤツもいるし、

どんだけ詰まなくても給料がイイから子供養えるヤツもいるし、

環境とか待遇とか福利厚生とか同僚とか社風とか、どこが合ってるかなんて、  
どれだけ広告に頑張ってる書いても、ぶっちゃけ働き始めるまで分かんないだろ。

水野 やっぱり面白いですね、石川さん。

石川 え？

水野 僕とは発想が違うや。

石川 いや、今のは、清見さんの受け売りだけ……

水野 流石だなあ、清見さん。

うんうん、と言葉を噛みしめている水野。

石川 ……全体のコンセプト、どうする？

水野 はい。ミカタさんは今、事業としては変革期にあります。味ごま塩一本から多角的な新製品開発を考えていて、料理教室やイベント出展などの広報強化もしたいそうです。できれば開発部に国公立農学部、管理栄養士を入れたい。タイプとしては、イベントなどの企画が好きで、働きやすさよりもやりがいを求めるような人。

石川 でも従来の社風としては真面目で堅実。

水野 そこがネックなんですよ。両立できるもんなんですかねえ。

石川 ……水野くんみたいな人じゃない？

水野 僕ですか。

石川 うん。マジメで、安定志向で、でもちよっとやりがいある仕事がいい人。

水野 ……味方さんに怒られちゃいますよ。僕みたいな学生、なんて言ったら。

石川 それとこれとは別だろ。

水野 ……。

石川 ねえ、こういうのどうかな。

石川が紙に企画を書き始め、盛り上がる二人。

一方、ジョブプレーパーを手にブツブツ言っている清見。

高瀬 ……前から気になってたんですけど、それ何してるんですか？

清見 ホワイト企業かブラック企業か当てる遊び。

高瀬 へ、へえ……。

清見 お、コレは優良物件だ。ナイスホワイト。

時折手を止めては、丸印を付けている清見。

清見 高瀬さんは、ウチはどっちだと思う？

高瀬、しばらく考えて、

高瀬 ホワイトじゃないですか。

清見 へえ。何で？

高瀬 遅くても終電で帰れて、土日も休みなんですよ。そんな広告屋、ホワイトじゃないですか？

清見 なるほどねえ。

二人の打ち合わせが終わったようだ。

石川 じゃあ、こういう方向で。

水野 はい。

石川 企画、通るといいね。

水野 はい。

水野の笑顔を観た後、席に戻っていく石川。  
と、電話が鳴り響く。

高瀬 石川。

石川 はい？

高瀬 いや、はいじゃなくて。

水野が電話を取る。

水野 お電話ありがとうございます、ライフワークデザイン 営業担当 水野です。

高瀬 ……あなた、今日の仕事、もう終わったの？

石川 はい。

高瀬 じゃあ、ちょっと、アツチ行くか。

石川 はあ。

バーカウンターに並ぶ2人。

高瀬 あんたさあ、何で電話でないの？

石川 え？

高瀬 電話。

石川 そうっすか？　そういうわけでもないんすけどね。

高瀬 はあ？　出てないじゃん、全然。

石川 何言ったらいいか分からないんすよ。

高瀬 そうやって教えてもらうの待ってたら、いつまで経っても成長しないでしょ。

石川 はあ……。

カウンターの横にある冷蔵庫から、

ビールを2つ持ってきて石川に差し出す高瀬。

高瀬 ん。

石川 会社で飲んでいいんすか。

高瀬 そりゃそうよ。　糸田さんが作ったバーカウンターなんだから。

石川 糸田？

高瀬 社長。

石川 ああ。

高瀬 ほら。(ビールを手渡す)

石川 俺、ビールってちよっと苦手で。

無言で冷蔵庫に戻り、代わりにチューハイを持ってくる高瀬。

石川 ありがとうございます。

2人、缶を開け、

石川 お疲れ様っす。

高瀬 ん。

高瀬が缶を合わせようとする。

が、石川がそのまま飲み始めたので、高瀬もそのまま飲み始める。

高瀬 アンタ、ホント今時の子だよねえ。

石川 あれ？ でも「空気読み世代」とか言われてるから、違うのか？  
よく分かんないっす。

高瀬 ウチの求人も、ジョブプレウェブ見て応募してきたんでしょ。

石川 そっすね。 あ、

石川、席に戻り、プリントアウトされた原稿を持ってくる。

石川 これっす。

高瀬 (笑って) アンタ、取ってあんの？

石川 なんか、気に入ってて。

高瀬 コレ、私を作ったんだよね。 コピー賞で2位とったの。

石川 そうなんすか？

高瀬 うん。 ジョブプレの中だけの、小さい賞なんだけど。

石川　すごいっすね。

高瀬　アンタも最初の目標にしたらいいよ。

石川　うーん、でも俺、コピーライターになりたいわけじゃないんで。

高瀬　デザインのほう？

石川　いや、俺、映画撮りたくて。

高瀬　……ウチ、映像の仕事、ほとんど無いよ？

石川　はい。

高瀬　……アンタ、結構、会話かみ合わないよね。

石川　そっすかね。

高瀬、原稿を見ながら……

高瀬　コレのドコに引っかけたの？

石川　このキャッチの、「OBは大手広告代理店、絵本作家、ギタリスト」っていうのが、なんか、俺でも入社できそうだな、と思ったんですよ。

高瀬　どういうこと？

石川　色んなクリエイティブな人がいるんだなって。

俺、大学も映像科だったし、出たあとも音響のバイトとかしてたし、フツウの人とは多分やってけないだろうなと思ってたんで。

高瀬　はあ。

石川　でも今はこういう人、いないですよ。ちょっと騙された気分っす。

高瀬、苦虫を潰したような表情をしている。

石川 え、何すか。

高瀬 いやあ、もうホントどうしたものかと。

石川 はあ。

扉が開き、中年男性(糸田)が入ってくる。

糸田 チョコ、酒盛りか。いいねえ。

高瀬 糸田さん。

石川 お疲れさまです。

糸田 おう、やってるか。

石川 はい。

糸田 どうだ、仕事。

石川 大変っすね。

糸田 (笑って)そりやそうだ。人生は往々にして大変なもんだ。

石川 なかなか慣れないっす。

糸田 いつでもフレッシュでいいこっちゃ。

喋りながら、エアードゴルフのスイング練習をしている糸田。

石川 あの、このバーカウンター、社長が作ったって聞いたんすけど。



糸田 おう。

石川 このDJブースって……

糸田 何だ、お前も皿回すのか？

石川 いや違いますけど……

高瀬 アンタ、採用ホームページ見てないの？

石川 見ましたよ。

高瀬 糸田さんの経歴も書いてあったでしょ。元DJだって。

石川 え、社長が？ え？ え？

ガッハッハと笑う糸田。

糸田 まあここ十年位、やってないけどな。

高瀬 毎年忘年会でやってるじゃないですか。

糸田 あんなの遊びだよ遊び。

信じられない、といった様子の石川を見て、また笑う糸田。

糸田 仕事が終わってからなら、DJブースもバーカウンターも好きに使っていいからな。

石川 ……ありがとうございます。

糸田 おう、がんばれよ。

高瀬 お疲れ様です。

糸田が社長室に入っていく。

高瀬 「糸田さん」、ね。

石川 え？

高瀬 ウチ、肩書きで呼ばないから。

石川 ああ。なるほど。

高瀬 ライフワークデザインって社名、糸田さんが付けたのよ。

石川 そうなんすか。

高瀬 ウチの社訓、覚えてる？

石川 (一瞬考え)「働くことは、生きること」？

高瀬 それを英訳したの。

石川、しばし考えて、

石川 だったらワーキング・イズ・リビングとかなんじや。

高瀬 何でだよ。人生と、仕事と、デザインじゃん。

納得がいかない表情をしている石川。

それを見てニヤニヤと揶揄するように、

高瀬 でも、ちょっと保険の代理店みたいだよねえ。ライフワークをデザインって。はじめて聞いた時、チヅちゃんと盛り上がっちゃったもん。おかしいよねえ。

石川 そっすか？

真顔。

高瀬 ……心が折れそう。

石川 え？

高瀬 とにかく電話、出なさいよ。

飲み干した高瀬、席に戻っていく。

高瀬 お先に失礼します。

清見 おつかれー。

しばらくチビチビと飲みながら、

先ほどの言葉を反芻している石川。

石川 ワークイズリビング。 ワークイズライフ。 ワークイズライブ。

労働、は、人生だ。 人生は労働だ？

そこに興奮した様子の水野がやって来る。

水野 石川さん！ ムービーですよ、ムービー！

石川 え、何が？

水野 ミカタさんの新卒採用企画でムービー撮りましようよ！

ジョブプレWEBに短いのを載せて、会社説明会で長いのを流してもらうんです。安定してるけどやりがいがあるっていうのを、感覚的に分かってもらえるじゃないですか。先輩たちのインタビューとか、なんか、えーっと小芝居とか、僕、それくらいしか思いつかないですけど、石川さんなら面白いの作れると思うんですよ。

大変興奮している水野に対し、石川は要領を得ない。

水野 企画書にシナリオも載せてもらえませんか。

僕、絶対通します。頑張りますから。お願いします。

石川、しばし考えてから、

石川 うん…… いいけど、

水野 あっ、紙、ありますよ。

石川 あ、ああ。

石川は、差し出された紙に向かう。

しかし、先程まではサラサラと書いていたのに、

今回は筆が進まない。

石川 ……見られてると、ちよつと書きづらいな。

水野 そうですよ。すいません。また、よろしくお願いします。

石川 うん。

水野 じゃあ、お先に失礼します。

石川 おつかれっす。

再び紙に向かう石川。

コツ、コツ、コツ、とリズムカルに、シャーペンを紙に落とす音が聞こえる。

少しして何か書き始めるも、すぐに手を止め、二重線を引く。

その下にまた何か書くも、また消してしまう。

しばし思索したのち、紙をグシャと丸め、深く、細く、長く、息を吐いた。

石川 死にてえ。

席を立ち、荷物をまとめ始める石川。

石川 帰ります。

清見 ほうい。

ゴミ箱にポイと紙を捨て、帰っていく……。

と、社長室のドアが開く音がする。

郡井が口元をハンカチでおさえながら出てくる。

郡井 びっくりした。まだ残ってたんだ。

清見 糸田さんと面談？

郡井 うん、まあ。

清見 叱られた？

言葉を濁し、笑う。

清見 ……呑み行く？

郡井 (首を横に振り) 今日、もう帰る。

清見 お疲れ。

郡井は玄関の方に向かっていくが……

清見 チツ。

立ち止まる。

清見 お袋さん、最近どう。

郡井 ……来週、退院。

清見 そっか。良かったな。

目を落とす郡井。

郡井 ……お先に失礼します。

清見 おつかれ。

時計の秒針が、いやに大きく響く。

しばらく思索したのち、どこかに電話を掛ける清見。

相手は、出ない。

玄関の方へ向かい、また戻り、せわしなく机の上を片付ける。

清見 もしもし、今どこ。ちよっと話あるから行くわ。待って待って。分かった、今言う。

あのさ、俺…… 転職しようと思ってる。いや、今度こそホント。だから、その……  
ごめん、やっぱりそこで待ってる。

バタバタと荷物を持ち走っていく清見。

夜は更けていく……。

■ 3 十一月上旬 朝八時

電話が鳴り響いている。

ブラインドから光が差す。

と、床の荷物、正確には寝袋、がモゾモゾと動く。

によき、と現れたのは、清見。

清見 あいあい。　おう、おはよう。　はいはい、伝えときまーす。はーい。

と、高瀬が玄関から入ってくる。

清見 おはよー。

高瀬 うわっ、びっくりした！　徹夜だったんですか？

清見 まあそんなとこ。

高瀬 そんなに仕事溜まってるとなら振って下さいよ。制作、3人もいるんですから。

清見 へいへい、以後気をつけます。

高瀬 何がそんな切羽詰まってるんですか？

高瀬が清見のPCを覗こうとする。

と、スツとブラウザを閉じる清見。

高瀬 ……何で隠したんですか？



清見 いや隠してないよ。

高瀬 分かった。エロサイト見てたんでしょ。

清見 見てないって。

高瀬 やめてくださいよ、会社で。

清見 見てないって。

高瀬 どうだか。

高瀬、苦笑しながらFAXの束を取りに行く。

高瀬 ほらー！ やっぱリエロサイト見てたんじゃないですかー！

そこには、印刷されたデリヘルのチラシ。

高瀬 なんてこういうツメが甘いことするかなあ。

高瀬、チラシをまじまじと見ながら

高瀬 うわあ、カップ数まで書いてある。あ、この子可愛い。この子は中の下かなあ。

モザイクある子と無い子の違いって何なんでしょね。私なら怖くて指名できないけどなあ。  
うわあ、給料高っ！ 時給一万円以上完全歩合制ノルマなし！？

オプシヨン…… ああ、コレやったら全部もらえるんだ。へええ、凄いですね風俗って。

寮あり、託児所完備、送迎あり、保険完備、待機中はお弁当支給、待遇めっちゃいいじゃないですか。

その辺の会社でOLやるの馬鹿馬鹿しいですよええ。  
彼氏や夫に知られたくない場合はモザイク、ああそういうことか。  
面接の流れとかも凄い丁寧に書いてある。へええ………。

と、高瀬が何かに気付く。

高瀬 ……これ、求人チラシ、ですか？

清見 ……。

高瀬 え？ いやいやいや、んん？ ウチで受注したんですか？

清見は返事をしない。

高瀬はそれを肯定と捉えた。

頭上にクエスチョンマークが浮かび、それはいつしか焦りへと変わっていく。

高瀬 ダメですよ、ピンク系の受注したら。ジョブプレとの専属契約で、そうなってるじゃないですか。  
清見 ヤバイんだよ売上。

いつになく、真面目な顔をしている清見。

つられて真顔になる高瀬……

高瀬 いや、だからって。本社にバレたら、契約切られちゃいますよ。そしたらウチなんてホントに、

と、バタバタと糸田が入ってくる。

糸田 おす。

高瀬 糸田さん、ちよつと聞きたいことが、

糸田 すまんチョコ、後でもいいか！

追って頼子も入ってくる。

頼子 おはよ。

高瀬 頼子さん、

頼子 ごめんちよつと後で！

社長室の方へ入っていく頼子。

高瀬 ……何でしょうね。

清見 ……。

高瀬 バレたんじゃないですか、コレ。

と、石川がやって来る。

石川 おはようございます。

高瀬 おはよ。

石川 あれ？ 水野くんまだですか。

高瀬 まだだけど。

石川 そっすか。

高瀬 何。

石川 いや、今日朝イチで打合せの予定なんすけど。

清見 これだ。

PCを見ていた清見が急に声を挙げる。

高瀬 何ですか？

内容を読み込んでいるのだろう、返事をしない清見。

高瀬と石川が後ろから覗き込む。

清見 コレ。

石川 ……マジっすか。

高瀬 し、新聞、新聞。

と、頼子が顔を出す。

頼子 水野くん、まだ来てない？

高瀬 まだです。

清見 それでか。さっき水野から遅刻するって電話あったわ。

頼子 どんな感じだった？

清見 具合悪そうな感じ。

頼子 ありがとう。

頼子、電話を掛けながら戻っていく。

石川 ……どうなるんですかね。来週、新卒企画のプレゼンに行く予定だったんですけど……。

高瀬 新聞にも載ってます。

机の上に新聞を広げる高瀬。

それを見て……

清見 こりゃガチだな。

机の上に置かれた「味ごま塩」の瓶を手取る清見。

清見 誰か腹壊したヤツいる？

高瀬 私、使ってないです。

石川 食べたけど平気です。

清見 ロットが違うのかな。

石川 昔、冷凍食品でも産地偽装が話題になったじゃないですか。

俺、それも食べてたけど、大丈夫だったんですよ。

今更中国産のゴマでも農薬残ってても、何も問題ないですよ。

高瀬 ……いやアンタそういうことじゃ、

頼子 やっぱダメだ。求人、全部ストップ。

頼子がやって来る。

頼子 今週、ミカタさんの原稿、何本入ってる？

石川 ペーパーとWEB合わせてパート2件、正社員2件入ってます。

頼子 全部落としといて。

石川 はい。

PCに向かう石川。

と、郡井がやって来る。

郡井 おはようございます、すいません遅くなって。

頼子 最後の最後に、ホントつごめん！

郡井 いえいえ。水野くんは？

頼子 まだ。

郡井 じゃあ、先にやれることやっておきます。多分まだ解約の手続き知らないですよね、あの子。

頼子 うん、多分。

郡井 分かりました、資料出しておきます。

頼子 ごめん、任せた。いってきまーす！  
全員 いってらっしゃい（ロ々に）

静かになる社内。

高瀬 チヅちゃん、辞めるの？

郡井 うん。今月末付けて。

高瀬 そうなの？

郡井 本当は今日告知されるはずだったんだけど……

清見 ミカタの不祥事で全部フツ飛んだなあ。

郡井 （苦笑して）そうですね。

あ、清見さん。 經理の求人原稿、あれでいいと思います。すごくいいコピーでした。

清見 ……うん。 ありがとう。

郡井 あんないいいコピーも書けるんですね。

清見 まあいつもバイト向けのアホっぽいのか作ってないもんなあ。

郡井 （笑って）あとでデータくださいね。 とっておきたいんで。

清見 あいあーい。

営業スペースに向かっていく郡井。

石川 どんなの作ったんですか？

清見 そりやお前、原稿載るまでのお楽しみよ。

石川 えー。 あ、じゃあ俺いまからコンビニ行くんでなんか奢りますよ。

清見 ……コーヒー。

石川 戻ったら見せて下さいね。絶対っすよ。

清見 あいあい。

石川が玄関から出て行く。

社内に残されたのは、高瀬と清見の2人のみ。

高瀬 ……清見さん、ますますコレ、ヤバくないですか。

清見 何が？

高瀬 いや、さっきの……

清見 ああ。

高瀬 ミカタもどうなるか分からないし、こんな状況でバレたらウチ本気で潰されますよ。

清見、先ほどのピンクビラを見ながら、

清見 このビラ、いくらだと思う？

高瀬 話をズラさないでください。

清見 いいからいいから。いくらだと思う？

高瀬 ……十万、とか？

清見 一枚五十万。



高瀬 そんなに!?

清見 糸田さんが足使って、直々に貰ってきたんだよ。新店オープン、まあご祝儀価格っていうのかな。この後、既存店の原稿も3本くらいあるよ。やる?

高瀬 清見さん。

清見 既存店は一枚二十万、全部で合計百万。ミカタが出稿できない今、ウチの命綱だろ。

高瀬 でもバレたらジョブプレで原稿作れなくなっちゃう。

清見 ……高瀬さんは、何のために広告作ってるの?

高瀬 ……は? そりやお客さんと読者のためですよ。

企業の良いところを見つけて、本当に合う求職者に届けるために、

清見 自分のコピーで賞を取りたいからじゃなくて?

高瀬 ……それもありませんけど、

清見 オレは稼ぐためにやってんの。

何がいいとか何が悪いとか、ハッキリ結論が出るものでもないでしょ。

高瀬 私にとって清見さんがやってることはアウトなんですよ!

清見 俺にはセーフだよ。

高瀬 ……。

石川 水掛け論っすねえ。

石川が打合せスペースからヒョコッとやって来る。

高瀬 ……アンタ戻ってきてたの。

石川 はい、結構前から。

ポリポリと首元を掻く清見。

清見 オツサンの熱弁を聞かれちゃったかあ。

石川 (何故か感心しながら) 清見さんも激高すること、あるんすねえ。

高瀬 ……。

と、水野が入ってくる。

水野 おはようございます。

石川 おはよう。

制作の顔を見て、うろたえる水野。

水野 あの… 本当に、ご迷惑を、お掛けしました！ せっかく、原稿、作って頂いたのに、

清見 別に俺たちは迷惑してねえよ。郡井さんが解約手続き教えてくれるから、行って来い。

水野 分かりました。

営業スペースに向かう水野。

高瀬 ……アイツ大丈夫ですかね。

清見 まあ水野くんがしばらく新規開拓に回って頑張れば大丈夫だろ。

あとは引っ越しをどうするかだな。

石川 引っ越しするんすか？

清見 経費と社員数考えたら、こんな一等地のこんな広いスペース、無駄だろ。

石川 はあ。なるほど。(よく分かっていない)

高瀬 でも糸田さんが手放したからないんじゃないですか。

清見 去年、大リストラがあつた時も、結局引っ越さなかつたし。

清見 だからこれが糸田さんの正念場でもあるわけ。

糸田が水野の背中を支えながら戻ってくる。

糸田 チョコ。悪いけど、コイツに茶やってくれ。

高瀬 分かりました。

打合せスペースに座る糸田と水野。

水野はうなだれている。

糸田 いいか。お前は何も悪くない。これは客側の問題だ。

水野 ……………。

糸田 ヨリの代わりに伝えるが、しばらくは新規開拓に回ってくれ。

水野 分かりました。

糸田 新規はしんどいだろうが、何とか踏ん張れ。

ミカタも半年後には求人再開するだろうし、景気も少し上向いてきてる。

営業も追加で雇うから。な。

派遣会社をとにかく当たれ。あとは製造業な。リストはヨリに貰え。オレのクルマ使っていていいから。ガソリン代は領収書もらっておけよ。

水野 ……。

糸田 踏ん張れ。営業ってのは、そういうもんだ。

水野 ……はい。

糸田 じゃあちよつと出てくるわ。

全員 いったらっしゃい。(ロ々に)

入れ替わりに高瀬がお茶を持ってきて、水野の前に置く。

水野 ……ありがとうございます。

高瀬 そんな、落ち込むほどのことじゃないから。

水野 ……。

高瀬が席に戻っていく。

様子を伺いながら、石川が近づいてくる。

石川 水野くん。

水野 ……石川さん。あの、本当に、新卒企画の件…

石川 その件でちよつと。

水野 (バツと)何ですか。

石川 いや、今言うことじゃないかもしれないけど、  
水野 本当にすいませんでした。

石川 そうじゃなくて。

水野 すいませんでした。

石川 水野くん、ちよつと落ち着いて。

2人、打合せスペースに座る、

とその途端、石川がバツと頭を下げる。

石川 ごめん。シナリオ、書けなかった。

水野 ……。

石川 ごめんなさい。

水野 ……まあこんな状況ですし、逆に良かったのかもしれない。  
せつかく書いたのに、ボツになったら…

水野は、それ以上、言葉にできない。

石川 あのさ。

水野 ……はい。

石川 これ、水野くんだけに、言うんだけど。

水野 オレ、実は、大学の卒業制作… トンでるんだ。シナリオが書けなくて。  
…

石川 だけど映画は撮りたかったから、この会社入って、でもそれでもやっぱり書けなくて、そう、だから、最初から、俺なんか書けるはずが無かったんだよ、最初から。だから、水野くんは悪くない。

水野 ……なんか、それ励ましになってないような……

石川 ごめん。

水野 ……いえ。こちらこそ、すいませんでした。

石川 それだけ。糸田さんも半年後には再開するだろうって言ってたし。

また企画通ったら、頑張るから。今日に間に合わせられなくて、ごめんね。

水野 ……はい。

席へ戻っていく石川。

原稿を受け取り、書き上げ、FAXして……

なんだかんだ代わり映えしない一日が終わり、

あつという間に周囲は夜になった。

石川 ……水野くん。

水野は打ち合わせスペースに座ったままだ。

石川 水野くん。

水野 え。

石川 もう8時だよ。

水野 (時計を確認し) ……本当だ。

石川 ……もう帰りなよ。水野くんが最後だよ。

水野 ……ありがとうございます。

石川が水野の様子を気にしながら、帰っていく。

時計の秒針が、いやに大きく響く。

手元の紙を見ながら、ブツブツと呟いている。

机につっぷし、深い深い溜息をついたあと、どこかに電話を掛け始める。

水野 もしもし、ライフワークデザイン 水野です。

はいそうですね、お忙しいところ申し訳ありません。

少しだけ、少しだけお願いします。新卒企画の、いえそれは分かっています。

……契約金を、お約束通り、事前に代入したのですが、

サイトオープン間際のキャンセルということで、違約金が半額発生してしまうそうです。

いえ、あの、半年後でも構いませんので、

必ず掲載するということでしたら違約金は発生しないのですが…

分かっております。分かっております。

あの、確約さえ頂ければどうにでも、

電話は切られてしまったようだ。

再び電話を掛ける水野。

相手は、出ない。

何度も、何度も掛け直す。

水野　もしもし、味方さん、

電話は切られてしまったようだ。

再び電話を掛ける水野。

水野　もしもし……………

うっすらと、機械音声が聞こえる。

電話を切り、ヨロヨロと玄関へ向かう水野。

夜は更けていく……………

■ 4　十二月上旬　朝八時

電話が鳴り響いている。

高瀬　はい、ライフワークデザイン　高瀬です。

……………はい、少々お待ち下さい。　清見さん。



清見に電話を代わる。

清見 お電話代わりました清見です。 お世話になっております。 はい、かしこまりました。

顔のラインですね。分かりました。 はい。モザイクもうちょっと薄く。

目の大きさがそのままならよろしいですか。 はい。差し替え…… ああ、手首ですか。肩、ああ、タトウーありますね。分かりました。失礼します。

カチカチとマウスを触る清見。

高瀬 大分手慣れてきましたね。

清見は返事をしない。

嫌味たらしく続ける高瀬。

高瀬 女の子イッパイ加工できていいですね。私、コピー以外苦手なんで清見さんが羨ましいです。なかなか他人のリストカット跡を消すなんて経験できないですもんね。

清見は返事をしない。

高瀬 ……綱渡りすぎますよ、こんな……。

と、頼子がパーテーションから顔を出す。

頼子 チョコちゃん、今の電話、

首を振る高瀬。

高瀬 携帯、まだ繋がらないんですか。

頼子 うん。

高瀬 私、家行ってみましょうか。水野の実家って、電車で一時間くらいですよ。頼子 うーん、でもそれは流石にねえ。水野くんも、イイ歳した大人なんだし。

と、電話が鳴る。

高瀬 はい、ライフワークデザイン 高瀬です。

……はい！ いつもお世話になっております。いえ。

はい、少々お待ち下さいませ。

糸田さん、水野くんのお父様から、内線一番です。

よろしく願います。

頼子 お父様？

高瀬 はい。これ、やっぱりトんだんじやないですかね……。

頼子 ……ありえるねえ。

高瀬　今まで一週間出てこなくて復帰したヤツ、いなくないですか？

頼子は今までの同僚や部下の顔を思い浮かべている。

頼子　ああ……　居ないねえ。

高瀬　ビンゴ。

頼子　参ったなあ……。

糸田　ヨリ！

と、糸田が大声で叫んでいる。

糸田　ヨリ、すぐ来い！

もの凄い剣幕だ。

頼子、高瀬に向かって舌を出し、

頼子　今行きまーす。

頼子が走って社長室に向かう。

高瀬　こりゃトびましたね。

清見 トんだな。 まあ、半年なら保ったほうだ。

高瀬 営業募集の原稿どうします？

清見 高瀬さんやつといてもらえる？

高瀬 分かりました。

石川 なんか、意外っすね。

高瀬 何が？

石川 もっと、2人とも、感傷とか、あるのかと。

顔を見合わせる2人。

高瀬 この業界、離職率高いからねえ。

清見 ホラ、何とかって有名な詩人の。

石川 詩人？

清見 あれ？ 俳句の人だっけ？ 演劇の人だっけ？

石川 誰ですか？

清見 何だっけ、「さよならだけが……」

糸田 みんないるか。

と、糸田が、顔をグシャグシャにした頼子を抱え、やって来る。

高瀬 ……はい。

糸田 水野が死んだ。  
全員 ……。

自然と、佇まいを直す。

糸田 一昨日の夜、自宅マンションから飛び降りたらしい。  
俺たちは今からご両親のところに行って話をしてくる。  
私物を棺に入れたいそうだから、まとめておいてくれ。  
通夜は夜6時からな。皆、喪服に着替えて来るように。いいな。

返事はない。

糸田 いいな！  
全員 はい！  
糸田 ヨリ、行くぞ。

2人は玄関を出て行く。  
しばらく、沈黙が流れる……。

高瀬 ……コレ、取引先に電話とかした方がいいんですかね。  
あ、花？ 社葬、じゃないから会社名義の香典？ え？  
清見 高瀬さん。

高瀬 はい。

清見 とりあえず、糸田さんの指示があるまで待とう。

先に荷物、まとめよう。

高瀬 ……はい。

3人は奥のスペースから無言で荷物を運び込む。

清見 ダンボール箱、取ってきて。

石川 はい。

石川がダンボールを取りに行っている間、2人で物を仕分けている。

高瀬 コレって会社支給のペンでしたっけ。

清見 そうだね。

高瀬 コレは？

清見 それは違うっぼいな。

高瀬 何だコレ。 んん？ 何だ？

清見 ……高瀬さん、とりあえず、分かるもの、分からないもので分ければいいから。

高瀬 はあ。 でも私、全部よく分からないです。

清見 ……じゃあ、ちよっとコーヒー買ってきてもらえる？

高瀬さんも、好きな物買ってきていいから。

高瀬 はい。

入れ違いでダンボール箱を持ってくる石川。

清見 おう、センキュ。

石川 何でこんなバラバラなんですか、この辺り。

清見 高瀬さんが散らかしてった。

石川 えっ。

清見 まあ、そうなるわなあ。

しばらく2人、無言で仕分けている。

高瀬 戻りました。

清見 おかえり。

高瀬 コーヒー。

清見 ありがとう。

高瀬 あ、アタの分忘れてた。

石川 えっ。

高瀬 もう一回買って……

石川 いや、いいっすいいっす。

高瀬 そう？

石川 はい。

清見と石川の間に入り、同じように仕分けを始める高瀬。

清見 お、こりや凄い。

石川 何すか。

清見 今までの原稿、全部ちゃんとスクラップされてる。

石川 こんな小さいサイズのも？

清見 真面目だねえ。

高瀬が急にPCを立ち上げはじめる。

清見 ……何してんの高瀬さん。

高瀬 いや、データも私物かなと思って。

清見 ……うん。いい着眼点だ。もし写真とかあったら、焼いてあげて。

高瀬 はい。

と、高瀬が急に声をあげる。

高瀬 清見さん。

清見 ん？

高瀬 コレ。何ですかね。

そこには「僕が死んだら。+x+」というデータが残されていた。



清見 ……遺書？

高瀬 何で会社のパソコンに。

清見 会社の人に読ませるためだろ。

高瀬はぼんやりしたまま後ろずさっていく。

警戒しながらマウスを2回クリックする清見。

しばらく眉間に皺を寄せ読んでいた清見だったが、読み進める内に顔の緊張が解けていく。

清見 高瀬さん、読んでごらん。

首を小刻みに横に振る高瀬。

清見 大丈夫だから。ほら。

清見に促され、読み進めていく高瀬。石川も後ろから覗いている。と、

清見 ほらココ。

清見が一点を指さす。

高瀬の顔がぐにゃ、と歪む。

高瀬 ……私、言った。

清見 うん。

高瀬 想像力が無いって、言った。

清見 うん。

高瀬 でも、ホントじゃないですか。

想像力、無いじゃないですか。

想像力が無いから、自殺なんかするんですよ！

清見

……………。

それ以上、言葉にならず、嗚咽を漏らす高瀬。

石川が荷物をまとめ終える。

石川 ……こんなもんですかね。

清見 こんだけ？

石川 はい。一箱に収まっちゃいましたね。

清見 水野の半年は、ダンボール一箱分か。

石川 ……。

清見 もう出るか。

石川 オレ、持って行きます。

清見　じゃあ、また後で。

高瀬さん、行こう。

電気を消し、出て行く3人。

周囲はゆっくりと夜を迎える。

と、蛍光灯がつき、制作の3人と郡井が入ってくる。

全員、喪服だ。

清見　やっぱり結構FAX溜まってるな。

郡井　私チエックして転送かけときます。

高瀬　なんかゴメンね。有給消化中なのに。

郡井　いいって。今日だってチヨコさんに任せてたら絶対大変なことになってたもん。

高瀬　うん。ごめん。

石川　コレ。

清見　おう、ありがとう。

石川が持っていた香典返しの袋を受け取る清見と高瀬。

袋の中を覗いた高瀬は、瞬間、声も出さず、俯く。

清見　……何が入ってたの。

袋の中を覗く清見。

ぐ、と奥歯を噛みしめる。

中から取り出したのは、ミカタの味ごま塩の、大きな瓶。

ふ、と笑う。

清見　こんなに食べれないよなあ。

高瀬　食べきれませんよ。一生かけたって、食べきれませんよ。

清見　そうだよなあ。食べきれないよなあ。

高瀬　そうですよ。食べきれませんよ。

清見　一生かければ、食べられるかもよ。

高瀬　無理ですって。

清見　一生かけて食べればいいんだよ。

高瀬　無理ですよ。

清見　一人で食べようとするからだろ。皆で食べればいいじゃないの。

高瀬　……………。

泣いている高瀬の背を、ぽん、ぽん、と叩く。

と、頼子がやって来る。

高瀬　もう大丈夫なんですか。

頼子　一旦、荷物取りに。

郡井　あの……ご両親、どんなお話を。

頼子 うん…… 感謝されちゃった。

高瀬 感謝？

頼子 まさかだよねえ。自殺した部下のご両親に感謝されるとか。

チヨコちゃんが見つけたデータが、唯一遺書らしい遺書だったみたい。

高瀬 え、でもアレ、遺書っていうか、

清見 ありがとうとすいませんばっかだぞ。

頼子 ……学生時代は、ずっと、家でも暗かったんだって。

でも会社入ってから明るくなって、家でも私たちのこと、話してたみたい。

清見 ……アイツ、会社でそんな楽しそうだったか？

石川 俺は楽しかったすよ。

高瀬 なんでアンタの話になるのよ。

石川 いや、一番絡んでたのが俺なんで。

清見 楽しかったなら、何で死んだんだろうな。

石川 白黒つかなくなったんじゃないすか。

清見 ああ……なるほど。

高瀬 つけない、じゃなくて？

石川・清見 いや、

同時に喋ってしまい、気まずくなる2人。

石川が、清見に譲る。

清見 つかないんだよ。

石川 ……働けども、働けども、  
清見 白黒つかず。

「白黒つかず」

春、土を耕し畦ぬり水を入れ、汚泥に塗れ苗植える。

夏、額汗かき塩吹き鴨放ち、草を抜いては食べられる。

秋、稲穂刈り取りタザ干し黄金色、鳥もまたぐ草っぱら。

冬、こもり。乳飲み子残し出稼ぎに、アカギレ、オイル染みこんで、  
働けども働けども白黒つかず。

春、岩石穿ち削るツルハシの、切っ先欠けても金を掘る。

夏、床の目方束石敷き詰めて、砂に埋もれ夜を明かす。

秋、家の棟上げ丸太引きずって、地を這う鳶の醜さよ。

冬、こもり。呑み打ち買わず生きねども、土方の息子と馬鹿にされ、  
働けども働けども白黒つかず。

春、眠き目を擦り振る赤灯は、闇に飲まれし誘導員。

夏、鉄の溶ける火花に焼ける肌、抱く手にある白ほくろ。

秋、腐臭漂う丸穴で、银杏に染まる青ツナギ。

冬、こもり。落とした手足で金を得て、役人なれよと学ばせて、  
働けども働けども白黒つかず。

詩を読み始める2人。

途中から高瀬と郡井と頼子も加わり、後からやってきた糸田も加わる。

頼子 ……何でしたっけ、これ。

糸田 古い詩だな。日本の。

石川 今考えると差別用語だらけっすね。

糸田 昔はその辺、適当だったからなあ。

清見 頼子さん。糸田さん。

頼子 ん？

清見 ……話があります。

夜は、深く、深く、更けていく。

全てを黒く塗りつぶすかのように。

■ エピローグ 三月下旬 昼三時

電話が鳴り響いている。

しばらく、鳴り響いている。

と、誰かが走ってきて電話を取ったのだろう、音が鳴り止む。

石川 はい。ライフワークデザイン 石川です。

ブラインドから光が差す。

目を細める、石川……。

石川 どうも、お世話になります。一時間ってことは、4時とか5時ですか。はい、分かりました。あ、もう電話線抜いちゃうので、あとは携帯にお願いします。はい、よろしくお願いします。

高瀬 引っ越し屋さん？

パーティションの奥から、声がする。

石川 はい。4時半くらいにビルの前に車つけるそうです。

清見と頼子が玄関から腰を押さえやって来る。

清見はスーツ姿だ。

清見 おう若人、働け働け。

石川 働いてますって。

頼子 あいたたた、ちよっとミーくん背中押して、背中。

清見 あいよ。



高瀬が奥から写真立てを持ってくる。

高瀬 (石川に) アンタ、自分の机終わったの？

石川 備品を先にやってるんすよ！

石川が奥へと走っていく。

高瀬 頼子さん、これ(写真立て) どうします？

頼子 持っていく持っていく。

頼子の背中をマッサージしている清見にも目に入る。

それはウエディングドレス姿の郡井。

高瀬 ホント、このチヅちゃんキレイですよねえ。

清見 そうだなあ。

頼子 旦那、マジでイケメンだよねえ。先週もサーフィン行ったらしいよ。

高瀬 春にもやれるんですか。

頼子 年越しも海らしいよ。

高瀬 ひええ、寒そう。

と、清見の携帯が鳴る。

清見 ライフワークデザイン 営業担当 清見です。お世話になっております。

はい。支店の営業募集と工場のパート募集ですね。

今週は、本社の営業募集はよろしいですか？

お、ありがとうございます。

あと新卒採用でご提案したムービーなんですけど、来週シナリオをお持ちしますので、はい、よろしくお願いいたします。どうも。

高瀬、ニヤニヤしながら、

高瀬 完全に手綱握ってるじゃないですか。

清見 まあね。

高瀬 どうやって手懐けたんですか、アイツ。

清見 さあねえ。

高瀬 ええ、教えて下さいよ。

奥から石川がやって来る。

石川 高瀬さんも社長室手伝ってくださいよ。アレ、終わんないっすよ。

高瀬 えーヤダ。アンタの机を片付ける方がマシ。

石川 ちよっ。

高瀬がバサバサしていた原稿の束を奪い取る石川。

高瀬 何よ。

石川 なんでもないっす。

高瀬 (ニヤニヤしながら) え、何？ 何？

石川 なんでもないっす。

清見 高瀬さん、それお客さんに出す資料だから止めてあげて。

高瀬 だって石川からかうの楽しいんだもん。

石川 ホント最悪だこの人。

清見 あっ。

石川が持っていた大量の紙が、バサーツと撒き散らされる。

全員 あゝ……………。

清見 だから止めろって言ったのに……………。

石川 もーっ仕事増やさないで下さいよマジで。

高瀬 もう掃除機で吸っちゃえば？

石川 勘弁してくださいよ。

清見 ホウキで掃いちゃうか。

石川 いやいやいや清見さんまで。

頼子 あ、この体制、ちよっと、腰にクルわ。

それぞれ文句を言いながら、床に撒かれた紙を拾う。  
と、奥から糸田も出てくる。

糸田 何でコツチこんなに荒れてんだ？

高瀬 糸田さんこそ荷物の整頓進んだんですか？

糸田 いやあ、さっき俺が出したレコードが発掘されてさあ。

全員 レコード！？

糸田 俺が歌ってるわけじゃないよ。リミックスしただけ。

高瀬 あー、ビックリした。

糸田 懐かしいなあコレ。23の時だったかなあ。

と、糸田がDJブースのレコードに針を落とす。

高瀬 ホラまたそうやって脱線する！

清見 まあまあ。

レコードが掛かり始める。

「Life is Work」

おはよう 行ってきます おつかれ おやすみ

朝から夜までの時速1600キロ

また誰か飛び込む銀色の列車 虚しく光る青い灯

それでも今日だけは誰も死なない気がして  
戦争も 殺人も 自殺も 墮胎も 起こらない気がして  
でも きつと本当は何か起きるような気もして  
……でも……

おめでとう ごめんね ありがとう すいません  
生まれて死ぬまでの1920時間  
通信を飛ばし続けるけど 並行するレールは誰とも交わらない

それでも今日だけは誰も死なない気がして  
戦争も 殺人も 自殺も 墮胎も 起こらない気がして  
でも きつと本当は何か起きるような気もして  
でも、なんか今日は。でも、なんか今日は。  
でも、きつと今日だけは。

さよなら さよなら さよなら さよなら  
宇宙の果てから地球まで距離0次元  
いつかみんな炭になりその時初めて平等になる

それでも今日だけは誰も死なない気がして  
戦争も 殺人も 自殺も 墮胎も 起こらない気がして

でも きっと本当は何か起きるような気もして  
でも、なんか今日は。でも、なんか今日は。  
でも、きつと今日は。きつと今日は。今日だけは。

次々と梱包され、運び出されていく荷物。

明るいグレーの部屋には、何もなくなった。

(幕)